

Seber slave

体験版

世界観

巨大虚構世界セラフによってつくられた電子世界で、この世界に存在する者は本体から霊子を切り離し、新たな電脳体を得て生活する。

この、月につくられたセラフの、ムーンセルオートマトンの世界で、どんな願いもかなう聖杯をめぐる戦いが繰り広げられる。

登場人物

セイバー

金髪碧目の紅い舞踏服をまとった華麗な美少女剣士。身長は150センチと小さいが、トランジスタグラマー。自分を「至高の名器」と謳い、自らのマスターを奏者と呼び、心の底から信頼し、惚れている。真名はネロ・クラウディウス。奔放な性格だが、真実を見抜く力とカリスマを持っている。

ランサー

この世に現界してからは「世界一のアイドル」を目指すことを目標に活動を続けており、歌が好きなセイバーをライバルだと思っているが、ほとんど軽くあしらわれて憤慨している。真名はエリザベート・バートリー。我儘できまぐれな性格で、セイバーのマスターを「子リス」といいながらも自分のものにしたと思っている。

セラフと敵対する遊星の力に浸食されて驚異的な戦闘能力を会得したが、その身体は黒く染め上げられた。

「すまぬ、奏者よ……っ！」

可憐な叫び声とともに、真紅の大輪が宙を舞った。

その叫び声の主は、溶ける飴細工のように煌びやかな金髪に、陶磁器のように白く、羽のようにしなやかで、壊れそうなほど華奢な身体を、薔薇のような真紅のドレスに包んでいた。

しかしその華奢さを裏切るかのように胸部の成熟した美しい胸のふくらみに、おそらく目を奪われない者はいないだろう。

身体は細く、胸は豊満という矛盾した奇跡的な体躯の美少女だ。

その文句のつけようのない肢体に、目を奪われるほどの真紅のドレス衣装を身にまとい、今、それが残酷にもくるくると空を舞っている。

「あっはっはっ☆ざまあないわね、セイバー！」

セイバーと呼ばれた真紅の美少女が地面に落下すると同時に、一方の異様の少女が高らかに笑った。

ピンクの髪に羊の角を変形させた異形の角を左右に掲げているが、幼さを残した可愛らしい顔立ちが、小動物的可愛らしさへと演出を変化させている。

ほとんど隆起のない細い体軀に、花のように咲いた黒いスカートを揺らし、彼女は笑っている。

「うっ……奏者のコードキャストがあれば……」

セクター・トラップ・毒で一気にとどめを刺され、地面に這いつくばる真紅の美少女は、苦しげに顔を持ち上げる。

そこにあるのは、目がつぶれんばかりの金髪の間から覗く、零れそうなエメラルドの大きな瞳、小さな鼻、花びらを飾ったような可憐な唇と絶妙なラインを形どる細い顎。

誰が見ても目を奪われる、豪華な美少女だった。

未だ毒が身体中を蝕んでいるのか、苦悶の表情に眉をひそめるが、その表情さえ愛くるしく、彼女の魅力をただの一片も損なわせてはいなかった。

「残念だけど、子リスは遊星のリソースでつくった隔壁に閉じ込めてあげたわ。だからあんたへの援護どころか、この先あんたと会うことも永遠になくなったの♪」

ピンク色の髪的美少女が見下しながら宣言する。

力を込めると手折れそうな細さと胸板に、背中へコウモリのような羽を持つもう一方の少女は、勝ち誇った表情に満ちていた。

よく見ると彼女の身体のあちこちには漆黒に浸食され、その上に奇妙な文様が浮き上がり、まるでその成熟前の身体を食するかのようにはりつき、眺めていると眩暈をおこしそうな揺らめきを湛えている。

明らかに良い物ではない。

しかし、当の本人はその危険性を知ってか知らずか、ご満悦の表情でツカツカと真紅の美少女の前に歩み寄る。

その黒いスカートの後姿には、人間にはありえないもの、尻尾が存在していた。

それも、猫や犬のように細く可愛らしい物ではなく、そう、龍を連想させる隆起を湛えた、太く禍々しい尾だった。その先端がショッキングピンクに彩られている辺りが、この少女の少女らしさを残している唯一の部分らしい。

その尾を上下に揺らし、セイバーと呼ばれた小柄な美少女の頭上に立つ。

「今まで散々バカにしてくれたわねえ？アタシの事を小物扱いして、ほんんと失礼しちゃうわ、私はかのエリザベートよ！美の頂点に君臨するエリザベート・バートリーなの！」

怒気の含まれた彼女の声に、自分の正体を名乗る昂揚感も感じられた。しかしその怒りは真摯らしく、禍々しく長い、奇抜な武器をセイバーの目の前の地面に突き立てる。

「うっ・・・余はガツカリだ・・・。貴様を好敵手と認めていたというのに、このような手を使って余を貶めるとは・・・」

まるで小鳥がさえさえるような、人間の脳を蕩けさせるような響きを持った可憐な声が、セイバーの口からこぼれた。

エリザベートへの失望の言葉を吐いた苦悶の声すら、好事家が聞けば高揚しそうなほどの唯一無二の美声である。

「そうだ・・・！そなた、奏者をどうした！先ほど閉じ込めたと言ったが・・・、よもや消失に関わる措置など、ううっ、とっっておらぬだろうな！」

苦しげに状態を少し上げ、宝玉のような碧の瞳に力が籠められる。可憐ながらも凜として、それでいて普通の美少女とは明らかに違う陽のオーラと威厳に、華奢な身体が満ち満ちている。

そんな彼女に、毒に侵された自らを省みず、それを放ってなお心配される、「奏者」と呼ばれる人物を、羨ましいと人々は思うだろう。

声と容姿にそぐわず、傲慢な口調だったが、それがその姿の可愛らしさのギャップとなり、小動物が痲癢を起すような愛らしさがあり、一片も彼女の魅力を損なっていない。

「その点は安心なさい。ただ隔壁に閉じ込めて、セラフとは異なる領域に飛ばしたただけだから。けどドアを介して、こちらの情報は筒抜けみたい。最も、それを知らせる方法なんてないんだけどねー！」

そう言ってエリザベートは高らかに笑う。

「奏者」と呼ばれたセイバーの想い人は、無事ながらも、居場所は不明で、互いに通信しあうこともできないということらしい。

しかし、セイバーは「奏者」が無事だと聞いて目を瞑り、安堵の息を漏らした。

瞑ると音が出そうなほど長い金の睫毛が瞬き、奥に控える比類ない輝きを持つ碧の眼が、エリザベートを睨む。

「一体何が目的か知らぬが・・・奏者をすぐにでも解放するのだ、エリザベート！」

「あら、どうして？アナタ、アタシに負けたんでしよう？敗者が勝者に命令するなんて、なーんかおかしくない？」

そうやって、未だ上体を上げきれていないセイバーの細頸を、奇抜な長い武器の先端で強引に上向かせる。

「これまで散々バカにしてくれたお礼も兼ねて、これからあんたを断罪するわ、セイバー」

邪悪な笑みを浮かべて、エリザベートは宣言する。

「さあアンタたち、ぼさつとしてないでとつとやっちゃいなさい！」

エリザベートが命令すると、意思のない木偶人形、攻勢エネミーたちが倒れ伏しているセイバーを取り囲む。

「うぐっ・・・決着はついたというのに、まだ追い打ちをかけるつもりかっ・・・！」

荒い息を吐き、なんとか立ち上がろうとする美少女に、エネミー達が一斉に群がる。

「な、なんだ！何をやる！よせ、よさぬか！」

てつきり痛覚による攻撃をされると覚悟していたセイバーだったが、エネミーたちがとつた行動は彼女の想像を裏切った。

華奢な身体を包んでいる真紅のドレスに手をかけ、引きちぎりはじめたのである。

ビリビリと、花が散らされるように無残にも真紅の布が方々に舞い、舞う花びらが増えれば増えるほど、真紅に包まれていたセイバーの肌が零れてゆく。

眩暈がするほど白く瑞々しい、艶と弾力を湛えた最上の肌が光の元に晒され、華奢な肉体が露わになる。もともと露出の多い仕様のドレスではあるが、狼藉者に引き裂かれる露出とは意味が違う。後者は見る者に加虐心を与え、真紅の布の間から次々と現れる瑞々しい白肌に背徳的な淫靡さがあつた。

「そ、そこはいかん！やめよ！」

エネミーの手がセイバーの白いブラウスの胸元にかかり、そのまま力任せに引き裂いてゆく。

「——っ！」

その途端、白い布の向こうで窮屈そうにおしこめられていた丸みが突出し、見る者に眩暈を与えるであろう衝撃と美しさを露わにした。

セイバーの小柄な体型には似つかわしくない、零れそうな真っ白な乳房。下から掬えば左右に零れ落ちそうで、柔らかさの極致にありそうな代物だが、しかし瑞々しく張りがあり、それをとどめる、絶妙な造形。

手足より一層白いその表面の先端には、ほんのり色づいた薄い桜色の突起が憎いほど目立つ。

しばらくセイバーのドレスに無体を働いていたエネミーたちだったが、エリザの手の動きで動作を止めた。そこに残ったのはドレスのスカートをほとんど取り去られ、胴体のコルセットとわずかな袖しか残されていないほど、無残な有様と官能さだった。

「ほら、いつまで寝てるの。いい加減立ちなさい？」

体力が残っていないうえ、毒に侵されまともに立てないセイバーをエネミーに命じて立ち上がらせ、両腕を後ろに組ませ、白い胸を突き出すような恰好でエリザと対峙させる。

「ふん、生意気ね……。こんなの、ただの脂肪のかたまりじゃあない……」

自分にはない物をもっている嫉妬からか、エリザは完璧な形をしたセイバーの白い双丘を指で何度も押し付ける。

セイバーはエリザベートと比べて僅差ではあるが低身長である。それなのに、胸にそびえる双丘は標準以上の大きさと、腰の括れもムチムチと、しかし折れそうなほど細く、美尻は成熟した発達さを遂げている。幼さの残る麗しい美少女然としたそのギャップに、興奮をそそられるものも多いだろう。

「うあつ……。や、やめよ、このような無体、許されるのは奏者のみ……っ」

「その子リスはここにはいないんだって……。あら、柔らかいわね、すつごく」

下から柔肉をすくい上げ、軽く上下に揺さぶりをかけ、エリザは女性の至宝を弄ぶ。

「ううっ・・・あ、あううっ・・・な、や、やめよ、エリザ・・・余は、なんだかおかしい・・・！」

切羽詰まったセイバーの声に、エリザはさらに邪悪な笑みを浮かべていった。

「あら？まだ気付いていなかったの？セイバー。アンタが食らった最後の毒、あれチョー強烈なリビドーを混ぜ込んでおいたのよね。まあ簡単に言うくと媚薬？サーヴァントに効くかどうか、まあ実験だったけど・・・ちやあんとうまくいったみたね♪」

「うぐっ・・・卑怯だぞ、エリザ・・・はううっ！」

エリザは両手でセイバーの柔らかい双丘を掴み、無遠慮に揉みしだきはじめる。同性だが、セイバーのよ
うな立派な乳房はなく、処女である彼女には、感じる触り方などわかるうはずもない。

だが、乱暴な愛撫にも感じてしまうほど、セイバーが食らった媚薬は強力なものらしかった。

「んんっ・・・あ、やめよ、ううう・・・っ、あ、ああ、あっ・・・！」

タップと下から上に、毬でもつくかのように乳房を弄び、セイバーの変化を楽しんでいたが、エリザは少々不満げだった。

「確かに柔らかくて手触りは最高だけど……これだけ？男どもってこんなものに夢中になるの？イミわかんない」

「はあ、はあ……ならばすぐさまその無礼な手をのけよ……今ならば、コロッセオで獅子との闘技のみで許そう、エリザ……」

すでに欲情の片鱗を見せ始めているセイバーの声を無視し、エリザは片手を天高らかに上げた。

「このままじゃつままないから、ちょっと癪だけど愚民どもの手をかりるわ？」

その小さな手に光のモニュメントがあつまり、すぐさま瓦解して彼女の手に吸収される。そしてエリザは再びセイバーの見事な双丘へと手を伸ばした。

「はうううっ……！あっ……な、何をした……っ！」

「あらあらー、へえ、なるほど、こういう風に触るのね？いいじゃない、さつきよりも気持ちよくてイイカンジ！男どももたまには役に立つじゃない」

触るエリザの手つきが急激に変わり、さきほどとは比べ物にならない甘い感触がセイバーの身体を走る。乱暴だったエリザの手つきはなりを潜め、柔らかく、しかしその白磁の肌の表面をさわさわと撫でる手つきは、熟練の手練手管そのものだった。

「んくあぁっ！あぁ、はぁっ！」

ゾクゾクと快感がせりあがり、むしやぶりつきたいほど可愛らしい声をあげ、セイバーが喘ぐ。エリザの指が桜色の慎ましやかな突起に触れ、指で挟み、左右にゆっくりと擦り始めたのだ。

「あぁ、むっ・・・ね・・・やめ・・・あぁあぁっ！」

胸から痺れるような甘美な刺激が上半身を迸り、背中を突き抜けて、体中を痙攣させる。

「ちよっとエッチな情報をダウンロードしてみたの。愚民の痴話を覗くのは貴族としてちよっと品がなかったけど、たまには役に立つのね！アハハハ！」

「くうっ・・・そのような情報を・・・も、持っていた民をつ・・・う、恨む、ああっ！ぞっ・・・！」
強気に言うセイバーだったが、エリザに突起ごと掌に乳房を包み込まれ、そのまま円を描くように激しく揉みしだかれて、可憐な嬌声をあげて身悶えた。

「ふやあああっ！ああっ！はあああ、あふ、あああ、あああ！」

媚薬のせいで肌の感覚が研ぎ澄まされ、もともと敏感なセイバーの肌はさらにさらにと鋭敏になってゆく。胸から連続して湧き上がる熱と甘い痺れに、身体を弓のようにならせ、胸を突きだし、もつとと強請るような姿勢で愛撫を受け入れてしまう。

質量をふんだんに含んだ白い柔肉を、根元から先端に向かって絞り上げ、何度もそれを繰り返す。切なく、甘美な感覚が乳房に溜まり、セイバーの雪の様に白い身体をほんのりと紅く染めてゆく。

「ふふ、すごい声・・・そんなに気持ちいいの？こことかたまらない？」

「はううっ！」

そう言つてエリザに突起を抓まれ、全身へ一気に電流が走る。セイバーの身体が硬直し、指を離された途端、ぐた、と弛緩した。

「アツハハ！おもしろーい！」

その様子が気に入つたエリザは、無邪気な残酷さで、何度もセイバーの乳首を抓み、捏ね、離し、また抓み、擦り、離し、何度も繰り返した。

「ああつ！はあ、やああああ！あふううつ！あん、あつ！ああつ！くふうううう！」

エリザが仕掛けるたびに、セイバーの華の唇から切なげな喘ぎ声がこぼれ、拘束された華奢な身体が、浜に打ち上げられた魚のようにビクビクと暴れ、硬直する。

弄ばれる突起は充血し、すでに指で感じられるほど硬くなり、桜色から成熟した紅に変化していた。

「ふふ、随分感じてゐるみたいね・・・ここはどう？」

そう言つて絶妙なウエストのくびれに指をさわさわと這わせ、敏感な脇腹を指先でくすぐる。

「ふあっ！あっ！くすぐったいぞ、やめよっ・・・ひぐっ！エリザっ！」

「じゃあここは？」

窄まった臍のあたりにも指を這わせ、滑らかすぎるセイバーの肌の感触を愉しむエリザ。セイバーの肌の感触はまさに極上の肌触りで、いつまでも触っていたい欲望に駆られる誘惑を持っていた。さらに感じ始めて皮膚からしっとりとした汗が浮かび、その感触が吸い付くような滑らかさで、同性ながらエリザベトは羨んだ。

「あらあら感じちゃって・・・どこを触っても感じるのね・・・でも、やっぱりここが一番感じるんですよ？」

そう言って、すっかり硬くなった桜色の先端を指で円を描くようにこね回した。

「んんんっ！んぐっ、やあああ！」

「ふふん、エッロい乳首・・・吸うともっと感じるんですよ？」

予想以上のセイバーの反応に嗜虐心を煽られたエリザは、さらにセイバーをおいつめようと、その小さな花卉の唇を、白磁の上の紅にかぶせてゆく。

「ああっ！いかんっ！ぐっ・・・あ、ああああ・・・！」

セイバーの華奢な身体が折れそうなほど仰け反り、右の乳首に食らいついたエリザの口腔に大きく反応した。

温かい舌は今のセイバーには灼熱に感じられ、チロチロと動いて上下に跳ねられるたびに、言い知れぬ甘美な電流が身体を流れ続ける。

「はうっ！」

カリ、と先端を甘噛みされ、電流はこれ以上ないほど強く走った。それに気をよくしたのか、エリザは吸血鬼特有の尖った犬歯で、何度も乳首を甘噛みする。

「やっ・・・あああ、やめよ、はううう・・・こ、これはたまらぬ、ううううう・・・っ！」

柔らかい乳房ごと、食するかのようには大口を開けて白いまろやかさにかみつき、キュ、と噛みついては、舌先でチロチロと舐めるといふ、飴と飴のような愛撫を繰り返すうち、セイバーの身体は完全に抱かれる女の身体に成り始めていた。

「あつ・・・あ・・・ああ・・・あ・・・」

幼さすら残っていた可愛らしい美貌に女の色香が加わり、絶世の美しさが変わってゆく。金の髪を揺らし、淫蕩に溶かされてゆく様は、まさに値千金だ。

「ほら、私は口でするから、アンタたちは後ろから揉むのよ！」

そう言って木偶の坊のエネミーに命令し、エリザは右から左の乳首へと標的を変えた。

突起をいじられるだけでどうしようもなく感じてしまうのに、さらに乳房の表面を撫でられるという刺激が加わると、その感度は倍以上に上がる。

するりと背後から人間の手を模したエネミーの掌が見事な形の乳房をすくい上げ、やわやわと揉み始める。セイバーの美乳がふわふわと形を変え、その熱をどんどん上昇させてゆく。

そして、エリザがさきほどまで弄んでいた突起にまで指をかけ、上下に激しく擦ってさらに感じさせようとする。

中略

華奢な身体を震わせて、セイバーは股縄で絶頂してしまった。しかし、彼女の受難はこれだけでは終わらない。

エリザが薦を握りなおすと、またもや変化が現れた。

滑らかだった薦の表面に無数の細かい突起がびっしりと生えそろう、凶悪な淫具へと進化を遂げる。

「イッたあとに刺激すると、またすぐイクんでしょ？今度はスペシャルコースでイかせてあげる♪」

そう言うと、エリザは再び股責めを再開し始めた。

「んひいっ！あああああっ！」

今度の薦の責めは凶悪だった。突起の形は不揃いで、ひどく硬いもの、ゴムのように柔らかい物、棘のようにつかかると引くもの、人間の舌の形状をしたものなど、様々だった。

しかし一番きついのは、そのどれもが、レオタードという薄布越しにセイバーのクリトリスをとらえ、それぞれの特性を生かして執拗に責め抜くのだ。

硬い突起はぶつかる様にして突起を弾き、柔らかい物はくすぐったく感じるほどの刺激でじわじわと責め
たてる。棘の形をしたものは、的確すぎるほど正確に陰核を搔き上げ、鋭敏な快楽をセイバーに打ちこん
でくる。人間の舌の形状をしたものは、ぬるぬるとした感触で巧みに快楽を引き上げる。

前から後ろへ引きずり回されるより、後ろから前へ引かれるほうが快楽が強かった。

そのため、知らずセイバーは股間を突き出すような恰好になってしまい、濡れた秘部と、その接触部分を
白日の下に晒す格好をとってしまったことに気付いていない。

どれだけのNPCやサーヴァントが、この光景をみて喜んでいるか、想像だに難くない。
憎しみでセイバーを責めるエリザですら、その美しさと淫らさで胸がときめくほどだ。

その有体を知らぬのは、本人のセイバーだけである。

「はうう・・・っ！あうっ、ああっ！やめよっ！くうっ！んんっ！んあああっ！」

さきほど絶頂したばかりだというのに、激しい責めで再び快感の波に身体が乗り、快楽の頂点へと近づき
つつある。

先ほどとは違った形状のさらなる苛烈な股間責めに、セイバーは我慢することすら許されず、ただ鳶に引
きずり回される美しい人形のようにだった。

「ああっ！い、今、胸はっ・・・！」

エネミーが左右から近づき、放り出されたままの美乳へと手をかける。

下から柔らかく揉みしだき、先端の突起を指で素早く擦られると、頭が快感で白んでしまう。下半身の快楽だけで精一杯だというのに、これ以上快楽を積み重ねられてしまつては、セイバーにはもう、堪えようがなかった。

愛液でぬるみ、限界まで敏感になったクリトリスを鋭くえぐられ、時には優しく擦られ、強烈な絶頂への切迫感にセイバーは戦く。しかし、どうにもならない。

レオタードの薄布越しに感じるさまざまな異なる感触がおぞましいほど気持ちよく、堪えがたいほどの快感でセイバーを飲み込んでゆく。

「あああああ！だ、め・・・だあああっ！ふあ、ああああ、あああああああー！」

さきほどの絶頂よりも深く、圧倒的な快楽が下半身を覆い、全身へ電撃となつてつたわってゆく。比類ない金髪の美少女が身体をガクガクと震わせ、壮絶な絶頂を迎えた。

葛が食い込んだ秘部からは一気に透明の体液があふれ、それは地面に水たまりをつくるほど大量に放たれた。

「あ……あ……うう……」

腰をビクン、ビクンと小さく跳ねさせ、グタリと首を垂れ、うなだれたセイバーの様子を見、エリザはこれ以上ない満面の笑みを浮かべて高らかに笑った。

「アツハハハ！すつごーい！本当に出たわ！初めて見た！これが潮吹きなのね！？なかなか潮吹きをする子はいないらしいけど、セイバーは見事にやってのけてくれたわ！ホント淫乱皇帝ね！ほら、子リス、見てたでしょう？あんたのサーヴァントのエッチな姿！」

虚空に向かって声をあげると、エリザベートは満足に満ちた表情で、うなだれているセイバーへと歩み寄る。

髪を掴んで無理矢理上を向かせると、セイバーは双眸を閉じ、長い金の睫毛から涙を流していた。

「ウフフツいいショーだったわよセイバー。でも、まだまだこれからよ、処刑は始まったばかりなんだから……！」

嗜虐的な笑顔を浮かべ、エリザベートは両手をあげて高らかに宣言した。

中略

鳶の内側には極小の毛が生えそらい、触ると見かけほど柔らかくはなく、絨毛一本一本から確かな感触が伝わってくる。

「も、もうやめよエリザベート……このようなこと、続けたところで不毛だっ……」

度重なる淫撃で虫の息同然のセイバーが、打ちのめされきった声で訴える。しかし、当然エリザは止めようとしなない。それどころか、更なる責め具で再びセイバーに最上の屈辱と快楽を与えようとしている。

「次はこれね♪しっかり擦って、イカせてあげるわ……」

そう言うと、開かれたセイバーの両足の間に近づき、指で淫芯を抓むと、手にした鳶をクリトリスに巻き付けた。

絶頂したばかりでドクドクと脈打つ敏感な肉突起に、鳶の毛の感触が当たる。

それだけで腰が砕けそうな快感だというのに、さらにキュウと締め上げられ、セイバーは快楽の悲鳴を上げた。

「んはあああつ！やめよ、もう、そこはっ・・・！」

しかし当然エリザはやめる気配はない。希代の美少女へと、残酷な快楽責めを開始しはじめた。

「しっかり擦ってあげるわ？思いつきり啼きなさい？」

そう宣言すると、陰核に巻き付いた蔦を左右交互に引っ張り、激しい摩擦責めを開始した。

「んはあああつあ！おおおつ！はあ、あああああつ！あああつ！あつ！あああつ！やめえええ！はふう、はあ、あああああ！」

指で擦られるだけで感じる部分に、蔦を絡められて縛り擦られ、さらに内側には繊毛まで生えている。乙女にとってこれ以上強烈で、鋭敏な快感はないだろう。

セイバーの引き締まった裸体の四肢は、許容量を超えた快楽のため激しく暴れ、鎖のジャラジャラとした摩擦音が辺りに響き、絶頂していないのに股間からは蜜があふれ、腰が無意識にビクビクと脈打った。

ジュツジュツ、ジュルルル・・・

淫靡な音を立て、愛液を巻き込みながら容赦なく陰核を責められる。

先ほどの責めとは比べ物にならない鋭敏な快楽の棘に、セイバーは悲痛な艶声をあげるしか術がなかった。

「ほおおおっ！おおお、あお、んああああああ！」

「あっははは！すごい声！なーんてはしたないのかしら？」

セイバーを責める手を休めることなく、エリザは高らかに笑う。左右に引き擦る手の動きが速められ、さらに快楽の衝撃が倍増する。

「あうっ！あっ！あうっ！あうっ！ああああああ！あああああああー！あー！あー！」

グン、とセイバーの腰がこれ以上ないほど反り返り、股間から勢いよく透明の液体を吹きだし、極上の絶頂を迎えた。

「イッた？でもまだよ、セイバー」

エリザの残酷なところは、絶頂が終わっても薦引きを止めないところだ。まるで彼女に恨みでもあるのか、執拗にクリトリスへの虐待を止めようとしなない。

「はおおっ！今は、今は敏感でえええっ！」

絶頂したばかりで未だドクドクと血液が激しく流れる下半身を、遠慮ない素早い摩擦で追い込み、もう一度セイバーを絶頂へと導いた。

「ああ、あつあああああつ………！」

腰を支えているエリザベートの手を振り払う勢いで、少女の細腰が激しく痙攣する。

何度も噴出された淫らな潮が地面に水たまりをつくり、彼女がいかに強烈な快感を浴びせられかけられたのかと推測できる。

「まだ終わらないわよ……随分これが気に入ったみたいだから、しばらくこれで責めてあげる！」

「き、気に入ってなどいないっ！か、感じすぎてっ……あああ！っ！あつ！あつ！あつ！」

さらに左右に薦を引き続け、弾力のある繊毛が敏感の極みにある陰核を責めまくる。

「ぎっ……！あ、ああああっ！」

苦悶ともとれる嬌声がセイバーの口からこぼれ、背中を反らせて激しい反応を示すが、エリザはそれ面白がって、放り出されたクリの先端に舌を絡ませた。

「はああああっ！やめよ、感じすぎて、これはいかんっ……！」

これまでの絶頂とは違う段違いの愉悦がどんどん押し寄せ、恐怖すら感じる快感へとセイバーは追い込まれてゆく。

クリの側面を薦で激しく扱かれながら、全体を舌でぬるぬると激しく舐め回され、二重の快楽にセイバーはあっけなく陥落する。

「あああっ！あっ！あああぁー……！」

華奢な下半身が電撃を受けたかのように激しく痙攣し、壮絶な絶頂を迎える。

セイバーの意識は白み、快感の事しか考えれなくなってしまふ。

「はっ・・・あ・・・ああ・・・あ・・・」

快感の余韻で瞳を見開くセイバーを楽しそうに眺める、エリザベートの表情は爛々と輝いている。そして若干興奮した様子でセイバーに話しかけた。

「さあ、次はどんな遊びをしようかしら？まだまだ。徹底的に苛めてあげるわね・・・」

ぞっとする宣言を耳もとでささやき、エリザは再び新しい淫具を手にした。

今度の道具は万年筆程度の太さをした器具で、長さは指の第二関節ほど。これがどのようにして使われるのか、一目みただけで察する者は少ないだろう。

「も・・・もうよすのだ・・・これ以上・・・なんの意味があろう・・・」

「はあ？意味ですって？」

怒気を含んだ声でエリザは言い放ち、手にした器具をすぐさまセイバーの陰核へと近づけた。

筒のように中身が空洞になっているそれは、内側にびっしりと蛸の様に吸着する突起が並んでいて、包皮をむいたクリトリスへ直接それをかぶせてしまう。

蛸の吸盤は敏感極まるクリトリスを四方八方から吸引し、セイバーに快楽の激悦を浴びせかけた。

「ふおっ！おとおおお！」

ギチュギチュと音を立ててあらゆる方向から極小の敏感豆を吸い上げられる感覚に、セイバーはあられもない声をあげる。

しかしそんな彼女の様子に喜ぶこともなく、エリザは若干冷たさを帯びた瞳で身悶える少女を睨んだ。

「アタシがアンタを憎むのはねえ・・・アタシの欲しい物をずっと占有していたからよ。サブサーヴァントのキヤスターでも手に入れられなかった、あの・・・」

そこで彼女は言葉を切る。全てを話すのは、貴族としてプライドの高い彼女にとっては許されない一線だった。

貴族の自分が、平面の、ただの一介のウィザードに心を奪われているとは・・・

セイバーやキャスターのように素直に慕えば楽なものを、自分が貴族であるということと、自称アイドルであるという矜持が、裏腹な心を支配していた。

「だから許さないわ。ううん、ふさわしい罰を受けたら許してあげる。でもその罰は、永遠に続くと思いなさい？この程度の責めで音を上げてちゃ、これからは思いやられるわよ？」

そう言って、冷たい笑みを浮かべる。

一方のセイバーは、下半身で巻き起こる激悦に気を取られ、エリザの言葉など半分耳に届いていない状態だ。

「あううううっ！イク、イクぞっ！ああ、もう、取れ、取ってくれ！」

チュプチュプと音をたててクリのあらゆる側面を吸い上げる蛸足サックに、セイバーは音を上げていた。何度か激しく愛液が滴り、絶頂に近い快楽を感じているらしいことは明白だった。

実際、敏感な部分を多角から責められる感覚は筆舌にしがたいほど刺激が強く、ずっとキンキンとした快楽が腰骨まで届いている。

可憐な少女の悲痛な声が響き、これまでとは比べ物にならない勢いで潮が吹きあがる。まるで小水かのような勢いの凄さに、エリザは驚きとともに、胸のすく思いを感じた。

絶頂の瞬間目の前が眩いフラッシュに覆われ、後頭部が激しくビリビリと痙攣し、下半身が極限まで熱くなり、感覚が引き絞られるような激感が襲った。

これまでとは段違いの快楽の凄まじさに、一瞬セイバーの意識は彼方へと飛ぶ。しかしすぐにそれは立ち戻り、やはり極上の快感を味わう羽目になるのだった。

「あうっ・・・あうっ・・・！」

絶頂中も蛸足吸盤でキュポキュポと陰核を吸われ続け、緩やかに終わる絶頂がいつまでも終わらない。

身体がバラバラになりそうな強烈な淫撃をいつまでも味わい続ける感覚は、セイバーであっても耐えられるものではない。

やはりそれは、エリザが彼女の虚構電脳体に、快感を感じ取れる限界を引き上げる悪魔の耐性のプログラムを埋め込んだためだった。

そのせいで、可憐な花のような美少女は、その身にそぐわぬ暴力的な快楽をいつまでも感じ続けなければならぬ、耐えられる身体になってしまっていた。

「ふふ、セイバーったらなんて声をあげるの？ちゃんと意識はある？あるわよね？じゃあ、第二段階よ！
覚悟はよくって？」

※中略※

バチバチバチバチ！と、セイバーの慎ましやかな股間から炸裂音が鳴り響き、絶頂の凄さを物語るかのよう
に音を立てつづける。
ずっと続く絶頂のせいで気を失うこともできず、セイバーはただ、激悦に翻弄され続けた。

「はうっ！ううううううっ、あああ、ああああー……！」

可憐な美少女の口の端から淫らな涎がこぼれ、セイバのか細い肢体が激しく痙攣するのを見計らって、エ
リザは槍の矛先を取めた。

「あぐっ……う……うあ……」

がくん、とセイバーの身体が落ち、拘束している鎖がジャラ、と音を立てる。

パイプの振動責めは相変わらず続いているが、感じているのに、その快感に反応する力すら、すべて使い
切ったようだった。

肩で息をし、必死に空気を肺に送り込みながら、額から汗を流すセイバーを見て、エリザは少々機嫌を直したらしく、薄く口元に笑みを浮かべた。

「少しは思い知ったかしら？なかなかいい声で啼くじゃない、セイバー。もう一回よ！ほら！」
そう言うと、エリザベートは残酷な責めを容赦なく再開した。

槍の先端が一瞬で電気を帯び、再び開脚されたセイバーの両足に先端が触れる。

「あぐううううっ！あぐっ！あああああああああ！はああっああ！あぐっ！あつぐっ！んぎいっ！はあ、ああああああ！」

金髪の美少女の両足の間から、いつまでたっても閃光が終わらない。

先ほどは数十秒で終わった責めだったが、今度は分単位で継続絶頂を味わわせるつもりらしい。一体どれだけの激感がセイバーを襲っているのだろうか。

金の髪を振り乱し、首を左右に振って、電撃から逃れようと何度もガクガクと腰を前後に振るが、追尾効果でも付属させたのか、セイバーのクリトリスを責める槍の矛先は一切ブレない。

「ああああああああ！あぐあ！ああああ！あぎいいいい！あぐっ！あがああああ！」

セイバーの声が快感とはかけ離れた野太い声に変わり、いよいよ限界が迫っているらしい。

膣口からは小水のように潮がブシュブシュと何度も吹き上がり、この小柄な体にどれだけの水分を湛えているのか不可思議に思えるほど、淫液を噴き上げていた。

「うぐうううっ・・・あっ・・・あああ・・・っ」

セイバーが声をあげる力すら失ったとき、電撃の光がようやく薄くなり、エリザが槍の先端を引いた。途端、両手を縛っている鎖をジャラと鳴らし、ぐたりと弛緩きってセイバーは意識を失った。

時間にして二分ほどだったが、セイバーにとっては何時間にも感じられただろう。

俯いた顔から涙が幾粒もこぼれ、叫びすぎて口を開けっ放しだったため、口の端からも淫らな唾液が垂れている。

「そろそろこの責めにも飽きてきたところだし、次の遊びに移りましょうか・・・」

そう言われてホッと感じる心の余裕すら、今のセイバーにはなかった。

ただただ、継続して絶頂させられ、叫ばされた分の空気を肺に送り込み、下半身で未だに巻き起こっている愉悦の痺れに身体を震わせるだけだった。

だから、人の形に縛られていた両手の鎖が外されても、無様に地面へ顔を擦り付けるしかできなかった。

「う……ああ……」

やっと両手が自由になったというのに、今のセイバーには指一本動かすことはできない。

しかし、彼女の身体が力を取り戻すより早く、地面から新たな鎖が飛び出し、再び華奢な手を拘束した。両手をひと括りにされ、今度は地面に倒れた格好のまま再び人の文字に拘束される。

その代り、広げられた両足が急に上方へと引き上げられた

「んっ……くうう……」

背筋を若干反った体勢に、高さはエリザベートの腰のあたり、と比較的セイバーには負担が少ない位置でとまった。しかし大開脚を強いられ、立ったままとはまた違う屈辱的な体勢に、ようやく意識と体力を回復し始めたセイバーは、羞恥を感じはじめるようになっていた。

形であらわすとYの字型に近いだろうか。

しかしセイバーでなくとも、秘めた部分が丸出しになってしまうこの体勢に、男女ともども羞恥を感じずにはいられないだろう。

「はい、サービスよ・・・♪」

そう言ってエリザは、再び回復プログラムをセイバーの身体に埋め込み、快感の上限を上げて体力も回復させた。しかし、下半身に受けた絶頂の仕打ちは収まらず、ズキズキと愉悦を感じながら、セイバーはようやく顔をあげ、エリザに声を放った。

「はああ・・・いくら寛大な余でも・・・限度があるぞっ・・・。今すぐ奏者を解放し、このような悪趣味を止めるのだっ・・・!!」

奏者、と聞いてエリザの心に黒い雲が再び立ち込め始めた。

セイバーの正面から、開脚された両足の間に立ち、その見事な美尻をひっぱたく。

パシイイイン！

「ひぐっー！」

突然訪れた純粹な痛みに、セイバーは息を吸い込んだ。

「まだそんな事言ってるの・・・？いい加減学習なさい・・・このブタ！」

バシッ！バシッ！パシン！

セイバーの体格にしては立派に張った臀部を何度も打擲し、単純な痛みで罰を与える。

「いたっ！痛いぞ、エリザ！やめよ、余は痛いのは嫌いだっ！」

「ふん。言ってなさい・・・ほらっ！」

今度バシッ、と強く叩いたそこは、丁度股間にあたるどころだった。

「んおおおっ！」

セイバーの下半身にはいまだに快楽の疼きが留まっっていて、そこに激しい刺激を与えらえては我慢のしようもない。

尻たたきとは明らかに異なる快楽の声をあげ、セイバーは身悶えた。

「あら、やっぱりお尻ペンペンがお好きなようね？じゃあ、連続で行くわよ？」

「や、やめ・・・」

バシッ！パシン！パチュツ！パシッ！パシッ！

「はうっ！はうっ！はうううっ！やめ、ああ、弾ける、あああん！」

臀部に感じる鋭い痛みは、媚薬のせいだろうか、次第に秘めた部分にも響くように感じてきた。

痛いのには、衝撃が起こると、振動が蜜壺や陰核に伝播し、触られていないのにはしたなくも蜜液を垂れ流してしまう。

「あら、まさか感じてるの？お尻ペンペンされて感じてるの？」

バシッと最後に強く叩いた位置は、完全に膣口を通り、陰核を刺激した。

「んんんんっ！」

淫らな尻たたきはやうやく終わり、痛みと快感を混同させた罰は終わった。しかし、当然これですべてが終わりではない。

「全く、ほんと淫らな皇帝陛下……。そんなあなたにふさわしく、もつともつと気持ちよくしてあげるわ……」

そう言うと、エリザは再び虚構世界に新たな責め具を具現化させる。

ツカツカと前に回り、地面に顔を押し付けているセイバーの目の前に、それを突き付けた。

「なな、なんとっ……。なんだそれはあ！」

驚愕するセイバーの様子も、無理もない。見せられたのは一本の棒だったが、その棒から何十と人間の舌が生えそろうっているのだ。

一本一本がウネウネと動き、ぺちやぺちやと唾液をたらし、地面にまき散らしている。

「これからこれで責めてあげる。たぶん、死ぬほど気持ちいいと思うけど、実際死んじゃわないでよね？」

そうやってセイバーの正面から姿を消し、広げられた両足の間へと移動する。

「やめよ！そのようなもの・・・、余の身体に、一ミリたりとも触れさせるでないぞ・・・！」

「全く、立場がわかってるのかしらね？いつまでたっても上から目線で、少しはアタシのご機嫌をとるとか考えないのかしら？おバカさん」

そう言うとセイバーの立派なヒップに異様の淫棒を這いずらせた。

「ひいっ！き、気持ち悪いぞっ！やめよっ！」

ひるむセイバーに構わず、エリザベートはその小さな蜜壺の入り口へと穢れた異物を差し挿れ始めた。

「んぐっ、あぐ、ふあああっ！やめよ、ううっ！ヌルヌルして、気持ちが悪いぞっ・・・！」

何十と舌で埋め尽くされた肉棒に美肌を舐め回され、か細い肢体が身震いする。股倉に差し込まれ、膣口や陰核を舐められて、セイバーの腰に官能が走った。

「はうう・・・っ、こ、このようなものっ・・・！」

見た目とは裏腹に快感を感じてしまい、小柄な美少女は顔を赤らめて首を振る。

「あらなあに？気持ちいいの？」

そう言うと、エリザは棒を持ち変えてセイバーの股間へ肉棒を縦に密着させ、そのまま前後に擦り始めた。

ぬちゅ、ぐちゅ、グツチュグチュ・・・

「はああっ、んっ！あああああっ！」

膣口とクリトリス、下半身の感じる部分を無数の舌で舐められ、ゾクゾクと背筋に快感が走りまくる。動く舌は膣口を縦横無尽に舐め、クリトリスをベロベロと下品に舐めて弾く。

さらに前後に擦られ、ヌルつく感覚の気持ちよさも手伝って、セイバーの絶頂は想像よりも早く迫りつつあった。

「あっ・・・ああ、ううっ！」

※中略※

これ以上ないと思うほど敏感で淫乱にさせられた身体だったが、それをも上回る淫らな身体にされ、セイバーはすでに気を抜くと快楽に流されそうな自分を自覚していた。

そんなボーっとした頭で、セイバーはこれから自らの身に降りかかる淫らな畏など考えつくはずもなかった。

連れてこられたのは、極色彩に彩られたステージと、かなりの人数の収容を見込める観客席。

かつてエリザベートが勝手にセイバーの領地に設立し、暴徒化した観衆ともども蹴散らした場所だった。そのステージの上には、伴奏を奏でる楽団やステージ機器はない。

ただ、以前にはなかった大型スクリーンが設置され、一様に目をひいた。

「ほら、セイバー。セイバー！しっかりなさいよ！ほら、あれがあなたの処刑のためのステージよ？」

セイバーの頬をペチペチと叩き、絶頂しすぎて意識を朦朧とさせている彼女を正気付かせる。

仕方ないわね、とエリザベートは再び回復キューブを取り出し、セイバーの身体に溶け込ませる。

それでも体中に淫楽の余韻があるセイバーの意識ははつきりしなかったが、ステージの上にある物体を見て正気を取り戻した。

「なっ・・・！なんだあれはっ・・・！あれで余に何を・・・しようと言うのだ！」

セイバーが震える声で指したその先には、有体に言えば三角木馬。

当然その上に乗せられて快虐の限りを尽くされる様子を、スクリーンで大映しにされるのだろうが、その木馬が異様だった。

秘裂が食い込む三角の頂点は、尖った三角ではなく凶悪なデコボコがついた長細い板に差し替えられ、その前後の先端が上から縄で吊るされている。

どういう使い方をされるのか、これまで鳶触手で散々イカされたセイバーにはすぐに使い方を理解できずしまった。

「い、いやだ！エリザベート、せめて観衆は引いてほしい！」

鳶で股を責められていた時も全セクターに中継されていたとは言いが、こう生のNPCたちの目にさらされてのことだと考えると、恥ずかしくて消え入りたくなってくる。

死の瞬間があるとしたら、今しかない、とセイバーは思うほどだった。それほどあの責めは苛烈で、淫らで淫靡なものだった。

「なに言ってるの、まだグズグズとうるさいわねえ……。ほら、あれはノコギリ処刑よ！死ぬまで苦痛が続く代わりに、死ぬまで快樂が続くわ？ねえ、淫乱なアンタに必要な処刑方法だと思わない？」

口元は笑っているが、目は笑っていないエリザベートの顔を見て、セイバーは自分の言葉が頑として受け入れられないことに絶望した。

どんなに褒賞を与えても懇願しても、エリザベートはこの拷問を実行するつもりだ。

そして観客席には、ほとんどが男で占められた人の群れで埋まっている。投げかけられる歓声は、今のセイバーにとって聞くに堪えない言葉ばかりだった。

「ほら、みんなもアンタの処刑の時を待っているわ！さっさと行きなさい！」

そう言って、セイバーの裸体を覆っていた異形をババツと取り去る。

現れた一糸まとわぬ眩い白の裸体に、観客の声がさらに高まった。

皇帝という貴族階級の最高位にいたセイバーにとっては、入浴時も給支に世話されながらだったので、人に裸を見られるのは慣れていて。しかしセイバーは、今のこの瞬間だけは一枚の布で良いから、と渴望し、裸を晒すことを恥じた。

「いやだ、いやだエリザ！」

エネミーに担がれて何かにすぎる間もなく、ステージの上にあげられる。

「やめよ！余を誰だと思っている！」

しかし感情のないエネミーは、淡々と身体を動かし、セイバーの身体を強く握りしめながらその両足を大胆に開き、木馬の上へと誘導する。

「いやだ、いやだああああ！」

乙女の悲痛な叫びの直後、身体は重力のままノコギリ木馬の上に落とされた。

グチュウウ！と音が鳴り響き、同時に股間から全身へと、異形を食い込まされた快感の衝撃が伝播する。数々の凹凸を乗せ、硬そうに見えた木馬の頭頂部は案外柔らかかったが、無視できないほど柔らかくはな

かった。さらに不気味なことに、セイバーの体重に潰されていくつかの瘤がつぶれ、妖しげな粘液を零し始める。

そして間断なく詰められた大小の凹凸は、想像どおり様々な硬さを持っていた。未だ動かされず、セイバーが股に食い込む快感でもぞもぞしているだけで、小さな粒が、コリコリと敏感な部分を抉る。

「あつ・・・あうつ・・・あううつ・・・！」

ノコギリ台に乗せられて快感が脳天にまで伝わっている間に、セイバーは両手両足を拘束された。鎖は地面から伸び、小柄な美少女は直立した体勢で固定され、足は台座の最底部分、両手は脇を締めるような体勢で真下へ引っ張られ、仁王立ちの恰好をさせられたが、その両足の間には淫らな仕掛けが食い込んでい

「ほらー、みんなー♪」

ステージに上がったエリザベートが、マイクを片手に観客たちに呼びかける。

「これからこの悪辣非道なよこしま皇帝を処刑しちゃいまーす☆みんな、カメラとシャッターの用意はい？動画でアップして拡散してもオツケーよ？」

すると、観客から「おお」と野太い歓声が起こり、手に手に電子器具を取り出す。

「くっ・・・やめ・・・やめさせ・・・よ・・・いま、すぐっ・・・！」

快感に灼かれながらも、なんとか言葉を紡いだセイバーだったが、エリザは観客に顔を向けたまま、片手でさりげなくノコギリを前に揺らす。

「んぐうううう！」

ジャラジャラとセイバーを拘束している鎖が鳴り、予期せぬ快感に身悶える。

「勝手にしゃべってんじゃないわよ、バカ皇帝。アンタには、さらなる罰が必要ね」

マイクを下げてセイバーに耳打ちすると、股間の前でパチン、と指を鳴らした。その途端、セイバーのクリトリスが一気に鋭敏さを増し、そよぐ風さえにも感じてしまうほどの敏感さになってしまう。

「うあつ・・・ああ・・・ああああ・・・エリ、ザ、よもや・・・」

「ふふ、アンタのクリちゃんを、元の感度百倍にしてあげたわ？これで死ぬほどの快感が、また味わえるわね」

セイバーはその恐ろしい宣言に怖気を感じずにはいられなかったが、快感の方が勝った。直立して食い込まされているので、丁度ノコギリの頂点がクリに当たる恰好にされている。何もされていなくても、食い込むだけで感じてしまう上、感度を百倍に戻され、セイバーの身体へドクドクと悦波が揺らいでゆく。

「んー、これだけじゃつまらないわねえ。ねえ、みんな、物足りないとおもわなーい？」

そう言ってエリザがマイクを観客に向けてると、統一感はとれていないが、「物足りない」という旨の返答が一斉に帰ってきた。

「それじゃ、みんなの期待に答えちゃおっかなー？」

そう言うと、エリザベートは黒く光るプログラムキューブを取り出した。そのキューブはこれから引き起こされる事態を暗示しているかのように、禍々しく黒く妖しく輝いていた。

エリザがもう一方の手の指先でキューブに触れると、たちまちそれは破裂し、セイバーの上半身へとまとわりつき始めた。

「うああっ！な、なんだこれはっ……！」

それはキューブの色をそのまま継続した禍々しい色をしていて、表面はヌメリ、四方八方へ体軀を伸ばし、対比するようにあるセイバーの白い肌へと絡みつく。

そして、その肌の白さが憎らしいかのように、攻撃を始めた。

「ふあっ！？はう、うううううっ！」

白い乳房を下から掬われ、連続して揺さぶられる。暴力的に見える愛撫だったが、痛みは全くなく、ただ弾む乳房を丁度良い強さで連打されるだけで、セイバーは感じてしまっていた。

セイバーの身体に巻き付いた物体は、明らかに触手だった。しかも、その一本一本が異なる形相をしている。全体的にはぬめりのあるウネリを帯びているが、よく見ると、ある一本は絨毛をびっしりと生えさせ、

ある一本は球状の瘤を等間隔に生やし、ある一本は先端に人間の口が付いたような形をし、ある一本は身体中を血管がはい回っているかののようにデコボコを備えている。

ヌルヌルする触手が、媚薬で感度の上がったセイバーの白い肌を縦横無尽に撫で練り回す。全身に吸盤をそなえた蛸足触手がセイバーの身体をチュウチュウと吸い上げ、人の口で吸われているに近いその感触に、セイバーが喘ぎ声を上げる。

「んふうううっ！ふあ、い、いやだ、ああっ！こんな物、取り去ってくれっ！」

小さな蕾のような乳首を口触手でつままれ、そのまま引っ張られる。見事な乳房が紡錘形に形を変え、痛さよりも心地よさの方が先に立ち、セイバーはまたもや声をあげる。

しかし、上半身の愛撫だけに気を取られてはいられない。

瘤ノコギリを食い込ませている股間が、じわじわと熱くなってきたのである。体裁もなく言えば、痒い。クリトリスが、その周辺や膣口が痒い。徐々に自覚していたことだったが、まさかそのような悪夢に等しいことなど考えたこともなかった。

おそらく、最初に跨らされたとき、つぶれた瘤の中に含まれていた粘液が、この作用を引き出しているのだろう。そこまで考えは及ばなかったが、セイバーは自分が大変な危機的状况にあることに気付いていた。

股が痒ければ、自分は今絶好の遊具の上に乗っている。

腰を動かして擦り付ければ、すぐにでもこの痒みを解消してくれるだろう。しかし、それをするということは、百倍の感度になったクリトリスを刺激することになる。

そんな事になってしまえば、セイバーはもう正気を保つ自身がない。

拷問室でエリザベートにされた様々な拷問を思い出して、セイバーはごくりと固唾をのんだ。

百倍の感度のクリトリスに吸引サックを付けられ、十度絶頂するまで許されなかった。触手にぐるぐると巻き付かれ、ヌルつく液体をかけられて腰が抜けそうなほどの摩擦責めを味わわされたり、電マで膣口ごと、クリを巻き込みながら振動させられ、何度も気を失いかけた。

過去の出来事を思い出すと、セイバーの身体が意思とは裏腹に発情しだし、回想に浸って性感帯が反応し、どんだん股が濡れてくる。

「ふぁ・・・やつ・・・」

くい、と小さく腰を引いただけで、涎が出そうなほどの愉悦が巻き起こる。ブルブルと小さく震えるセイバーを見て、エリザは彼女の置かれている状況を瞬時に判断し、あの邪悪な笑みを浮かべた。いや、セイバーがこうなるように仕掛けたのは、ほかならぬ彼女だ。

エリザベートはセイバーの跨っている瘤ノコギリに手を掛けると、前へ大きく押し始めた。

「ひっ！ひひひひひっ！」

コリコリ、ゾリツ、ジュルルル、カツツ、ヌルヌル・・・

様々な感触が股の内弾け、セイバーの敏感なクリトリスを弾きながら、瘤が通過してゆく。目から火がでそうな快感と、痒いところを刺激される愉悅がないまぜになり、セイバーの頭は軽いパニック状態に陥る。

後ろに引かれたなら、今度は前に押す。

再びセイバーの敏感すぎる股が激しく摩擦され、拘束された鎖をジャラジャラ鳴らし、快感と愉悅の両極の刺激に背をしならせる。

「はぐっ！あぐ、あぐうううっ！」

ノコギリの動きが止まり、たった一往復しただけでセイバーはガクリと頭を垂れ、虫の息となった。

はあはあと息をついて身体の熱を鎮めようとするが、当然その程度ではこの疼きは収まりそうには、ない。

「あーら、何モジモジしてんの？身体が疼いてたまらないってカンジだったから、ちよつとフライングしてノコギリを動かしてあげたけれど、随分良かったみたいね？」

エリザベートはその声をマイクに通し、観客に聞こえるように言い放つ。

「うあぁっ・・・エリ・・・ザ・・・も・・・やめよ・・・」

たった二擦りされただけでセイバーの身体は火が付き、もはや自分では制御できないほどになってしまっていた。慎ましやかな乙女の秘裂はジンジンと疼き、腫れたように大陰唇がぼつてりと膨らみ、百倍の感度にされたクリトリスが男性器のようにそそり立つ。

「全く、このエロ皇帝様は、早くお股を擦ってほしくてたまらないみたいよー？自分から腰を動かして擦りつけようとするなんて、ほんと淫乱なんだから。」

まるでセイバーが自ら動いて急かしたかのような言い方をされ、それは違う、と反論したかったが、上半身を廻る触手に両乳首を吸われ、快感で口をふさがれてしまう。

「あああああつ！ああつ！す、吸うなああああ！」

「あーら、今おっぱいを吸われてるようよ？この淫乱皇帝様は、こんなにおっきなおっぱいをしてるくせに、敏感なのね？うーらやーましーい」

と言いながら、セイバーの乳首に吸い付いた触手を引っ張り、吸引力をさらに強め、激しく感じさせる。

「んああつ！はあつ！は、離せ、あううう、はああ！」

セイバーを責めるのは乳房に吸い付いた触手だけではなく、滑らかな小さい背中にも及んでいる。

繊毛を生やした触手が背中中の窪みをサリサリと擦り上げ、身体全体を愛撫される快感に身もたえする。

しかし上半身を動かせば、下半身にも振動が伝わり、それだけで敏感なクリトリスは快感を貪ってしまう。丁度硬めの瘤が真下に陣取り、さきほどからセイバーが身じろぎするたびに、コリコリといったぶられていた。

「んおっ！？おおっ！おおっ！」

百倍の感度になったクリトリスの感じ方は尋常ではない。エリザベートに回復キューブを補充されなければ、すでに感じるための体力は尽き、ある意味この快感地獄から解放されていたかもしれないというのに。

セイバーの額に冷や汗が垂れ、これから行われる饗宴のおぞましさに怖気を感じていた。このままエリザベートの遊戯につきあっているのは、地位的にも人間的にも破滅の一途をたどってしまう。

しかし、身を振って快感に声をあげる美少女を見て、観衆たちが一斉にカメラのフラッシュを焚く。記憶媒体に自分の無様な姿が記録されている……。

なんとという無様、屈辱だろうか。

今この身に起こっている事態を考えると、矜持高い彼女では、真向に死を選ぶであろう狂態である。しかし、そんな彼女の誇り高い精神すら、今は快感が理性の上に紗幕を掛け、強く意識することをボヤけさせている。

まともな状況で自分の無様な姿を自覚するよりは幸せかと思えたが、これから訪れる責めは、セイバーの身体にとってはまさに極楽の所業だった。

「じゃあ、そろそろはじめちゃおっかなー！みんな、3，2，1で行くわよー☆」

マイクを片手に、エリザベートはとうとう公開処刑を始めようと観衆に叫びかけていた。

それと同時に、背後の巨大スクリーンにセイバーの可愛らしい顔が大映しになる。後ろに光を受けてセイバー自身もそれを察したが、決して後ろは振り返りたくなかった。

「じゃあ、さーん♪」

そういうと、エリザは拷問ノコギリに手を掛ける。そのわずかな振動だけで、セイバーの下半身はビク、と跳ね上がる。

「にーい♪」

「え、エリザ、やめよっ！やめよっ・・・！」

「イーチ♪」

助走をつけるためか、エリザベートがわずかにノコを後ろに引いただけで、セイバーの腰はガクガクと震え、蕩けそうになる。

「ゼロツ！えーい♪」

※続きは製品版でお楽しみください※